小林豊「世界一美しいぼくの村」・「世界一美しい村へ帰る」を読む

西田谷　洋

一　先行研究の概観と問題

小林豊「世界一美しいぼくの村」（『新しい国語四下』東京書籍二〇〇二、二〇一一、二〇二〇、『新編新しい国語四下』東京書籍二〇〇五、二〇一五）・「世界一美しい村へ帰る」（『新編新しい国語四下』東京書籍二〇一五、『新しい国語四下』東京書籍二〇二〇）は、絵本版（『せかいいちうつくしいぼくの村』ポプラ社一九九五・一二、『せかいいちうつくしい村へかえる』ポプラ社二〇〇三・八）を圧縮・配列変更し小学校中学年向けに漢字表記を増やし挿絵も半分以下に削減している。特に前者ではアフガニスタンの自然と内戦が続く国内状況の説明、「パグマンはいいな。世界一美しいぼくの村」というヤモの村への思いが加筆され、作品末尾が破壊された村を見るヤモ一家の後ろ姿の絵を巻末から最後の一文のページに移動させている。小林豊も「私は作家であり画家ですから、（略）絵本よりも挿絵はかなり少なくなりますが、読み手に（略）挿絵を通して内容が良く伝わるようにそういう気持ちで描いています」[1]と有働玲子氏のインタビューで答えるように、挿絵付教材は挿絵と本文との総合芸術なのであり教科書版は作家が工夫した独自版としての完成度を持つ。当初は前者のみが採用されていたが、近年、シリーズものを読ませる構想のもと、後者とセットでの採用となっている。シリーズには第三作の主人公ミラドーがサーカスに参加していく第二作『ぼくの村にサーカスがきた』（ポプラ社一九九六・一一）があるが、村の破壊と帰還・復興への意思のプロットの帰結の点で第一作と第三作が採用されたと思われる。

アフガニスタンは、一九七九年のソ連軍侵攻と八九年の撤退、九六年のタリバンの全土支配、二〇〇一年のアメリカの侵攻と二一年の撤退、そしてタリバンの再びの全土掌握に至る過程で悲惨な内戦が続き、難民も数多く発生した。物語の舞台は、カブールの北西二〇キロのパグマン山系の麓の町と山間の果樹園地帯である。侵略・内戦のもとでは、豊かな恵みを持つ地域も暮らしや平和が脅かされる。そうした状況が物語の背景にある。

本編結末での村の破壊が絶望的に受け止められたことに対

し、佐藤明宏氏は、「戦争があっても大けがしてもこの人たちは希望を失っていない」[2]という児童の発言を紹介し、絶望のみではない希望の読解の方向性を示唆した。また佐藤氏は、「ふつう子羊を買う人はいません。（略）この親子には、大人の羊を買うに足るお金はありません。（くだものの売り上げで羊を買うのは不可能です。）この父親は、子羊という、これから育っていく〝希望〟を買いました」[3]という榧貴志宛小林豊書翰を紹介する。この考え方からすれば、父がヤモを一人で商売させたのは、単に兄の代わりというだけでなく、厳しい現実をたくましく生きる力を身につけさせ、生産と交易の喜びを実感させるためでもあり、父が売上げの全てで羊を買ったのははじめての商売を成功させたヤモを喜ばせる褒美であり、真っ白な子羊であるのは「希望」という自解だけでなくこれからの成長・可能性を象徴しうるからであろう。

勝倉壽一氏は二〇〇五年度版指導書の「戦争を背景にして、家族への愛、郷土への愛が少年の目を通して描かれている物語」という位置づけに対し、「冬の厳しい寒さの中を家を焼かれ、破壊し尽くされた村人たちは、戦火を逃れ着の身着のままで行く当てもなく流浪の旅に出るほかはない。それが、殺戮と破壊を目的とした戦争のむごさと非条理性であり」[4]、「この作品は平和への強いメッセージ性を訴えるもの」[5]とする。ただし、家族愛・郷土愛と平和への願いは両立し、そしてパグマン及び近郊の域外において戦乱が展開されている限りはそれをやむなく受け入れている人々が描かれている点で、平和への希求は限定的にも解釈できる。

結末の一文「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません」は、ヤモ一家・村人たちの生活とその場が失われたことをつげる。二〇一五年度版指導書も「最後の一文が読み手に強い印象を残す」と効果を指摘し、中地文・堀之内優樹両氏も指摘するように「わずか一文からなる結末部分、中心部分からの衝撃的な場面転換を伴って提示される結末部分に主題が集約されるという特徴をもった教材」[6]である。また、両氏は、挿絵の有無の点で、「原作の結末がそれまでの一切の消失を無機質に伝えている点で衝撃的事実を際立たせているのに対して、教材の結末は立ち尽くす家族の後姿を挿絵で提示することで情緒的な悲しみを誘うつくりとなっている」[7]と説く。

勝倉氏は世界一美しいという捉え方に対し、「作者の主観的な感想、誇張」[8]と切り捨てるが、それは表現上は語り手と主人公の思いであり作者とは直結できない。

すなわち「世界一美しいぼくの村」は、ヤモの父や兄を「父さん」「兄さん」と呼び、物語世界の知覚・感覚・感情はヤモの側に近く焦点化子をほぼヤモとする。

真っ赤なさくらんぼが、ろばのポンパーの背中で重そうにゆれています。
街道は日がのぼって、急に暑くなってきました。
にぎやかな声があっちからもこっちからも聞こえてきます。
戦争なんかどこにもないみたいです

一方で、主人公を「ヤモ」と呼び、文末がですます調であるように語り手はヤモとは異なることが示されている。すなわち「世界一美しいぼくの村」は語り手の表現とヤモの表現がある程度重ねられ、それによってときに両義的な解釈が生起しうることになる。

松本修氏らは、「でも、春はまだ先です」の「春」の意味を問う発問を、レトリック的特徴に関わる表層、部分テクストの共有、他の部分テクストや全体構造との関係の中で説明される解釈の一貫性方略の共有、オーバーラップによる解釈の多様性の保証、結末の一文に近くテクストの勘所を押さえている点から、読解をめぐる対話が可能な発問と位置づける。[9] むろん、松本氏らが大学院生での授業から妥当とした発問が、氏の言う描出話法すなわち自由間接話法に関する知識が不十分な小学校四年生に適当とは限らない。また、こうした解釈の両義性をもたらすのは自由間接話法に限らず、語りの時間構造や登場人物の立場の違い、あるいは読者の採用するフレーム・文脈など多岐にわたる点で、自由間接話法のみへの着目がかえって対話を狭めてしまう可能性も想定できよう。

さて、当該文を松本氏らはヤモの立場から「戦争が終わり、兄さんが帰ってくる時期」と捉える見解と、語り手の立場から「アフガニスタンに平和が訪れる時」と捉える見解が可能としつつ、「春」は「重層的な意味を担っており、どれか一つの意味に帰結するというものではない」[10]と説く。さらにいえば、「前後のテクストや全体構造を無視して」いると松本氏らは退けるが「春」を希望とする見解も、初めての販売経験の成功やこれから成長し得るはずの羊の購入という物語展開や兄の帰還や平和の到来という意味の複合からは可能である。

本稿ではレトリック・ストーリー・プロットレベルにおける接続関係を軸に両作を検討する。第二節では「世界一美しいぼくの村」のトピックを読解しつつ逆接・反転構造を、第三節では「世界一美しい村へかえる」のトピックを読解しつつ順接構造を、それぞれ分析する。

二　「世界一美しいぼくの村」における逆接・反転

タイトルにもなり、ヤモの言葉にも表れる「世界一美しいぼくの村」は、物語の大部分が町での出来事に割かれ、村の風景の直接的描写も冒頭の収穫場面にほぼ限られ、またヤモの言葉が発せられるのも美しい子羊を村に連れ帰った後であるが、どのように美しいのかが示されているわけではない。その意味でパグマンの村の世界一の美は内実が不明瞭なままタイトルとヤモの言葉によって読者に提示されている。したがって、物語の各所の評価を統合することでなされる。パグマンは自然が美しく、家族がそろって農作物を収穫し助け合って販売することで生計を成り立たせている。ヤモの「世界一美しいぼくの村」が果物販売から帰村した際の言葉であることは重要である。一日いなかっただけなのに村が「なつかしいにおい」を持つように、村が必須のものとして嗅覚的に捉えられている。それは町でのはじめての販売経験で村への愛や誇りが高まり、兄こそいないもののヤモや家族が村にいることが意味を持つことになる。そ

の際「バハール」という名前の子羊を連れて帰ることは、春になれば兄が帰ってきて家族が元通りになり世界で一番美しい村が完成することを示唆している。その意味で世界で一番美しい村は、平和・自然・家族・村人を含めた全てが美しいことを意味する。むろん、語り手はその後の村の喪失を知っているが故にヤモの感覚を通して村の「なつかし」さを先取って語ってもいる。

物語に特徴的なレトリックは逆接の「でも」の反復である。

a めったに雨がふらないので、かわいた土とすなばかりの国のように思われています。でも、万年雪をかぶった高い山が連なり、森や見わたすかぎりの大草原もあって、春になれば花がさきみだれ、夏になれば、果物がゆたかに実る美しい自然がいっぱいです。

b ヤモも、兄さんのハルーンと競争でかごいっぱいのすももやさくらんぼを取ります。村中があまいかおりに包まれます。でも、今年の夏、兄さんはいません。兵隊になって、戦いに行ったのです。

c 勇気を出してよんでみました。「さくらんぼ！パグマンのさくらんぼ！」でも、だれもふり向いてくれません。

d ハルーン兄さんならだいじょうぶ、きっと春には元気に帰ってくると、ヤモは信じています。でも、何だかむねがいっぱいになってきました。

e ヤモは、父さんにたのんで、白い子羊に「バハール（春）」という名前をつけようと思いました。でも、春はまだ先です。

a は読者の持つアフガニスタンの不毛の地のイメージに対し、実際には春には花が咲き、夏には果物が実る美しい自然が豊かにあることを提示する。そこは物語の舞台の一つ、パグマンの村とも重なる。b は兄と競争で果物を収穫して充実感があったそれまでに対し、ヤモに欠落感があるのは今年は兄が戦いに行っていないことが示される。また、充実した収穫は村の繁栄を意味するが、戦争が村に確実に迫っていることを示す。c はさくらんぼを売ろうと懸命に声をかけるが、その期待に反して誰も客になってくれない状態が提示される。d は兄の帰りを期待するヤモだが、南方の戦いはかなりひどく兄の死や戦線の拡大も匂わされ、ヤモが不安になっている様が示される。e では子羊を名付けることで春の到来を期待するヤモに対し、春がまだ来ないこと、すなわち事実としての春の到来と、象徴としての戦争による村の破壊からの村の再建、平和の到来が、遠いことが示唆される。

ここでは a がマイナスからプラスへ、b～e がプラスからマイナスへの転換がなされているとも考えられるが、[11] より適切には一般的イメージあるいは作中人物の期待に反する事実・実態が提示される逆接・反転の構文パターンである。ただし、d は実態ではなくヤモの心情となる。

さらにいえば、「でも」がなくともこのパターンは物語に見いだしうる。「戦争なんかどこにもないみたいです」というイメージに対しヤモのさくらんぼを宣伝してくれた「足のない人」

は戦争障害者だった。

「おじさんは戦争に行ってたの？」「ああ、そうだよ。おかげで足をなくしてしまってね」ヤモは、どきっとしました。ハルーン兄さんの顔が思いうかびました。

町では、戦争がないかのようなイメージがあるが、実際には戦争で怪我をした男がいたように戦争の傷跡があり、ヤモはそうした戦争の手が兄にも及ぶことをイメージしてしまう。また、食堂にいると話しかけてきたおじさんは父と戦争を話題にする。

「（略）上のむすこが戦争に行ってましてね。」「それは、心配ですな。南の方の戦いは、かなりひどいというし。」

この話を聞いてヤモは「ハルーン兄さんならだいじょうぶ」と思うが、兄が戦争で傷つく可能性を想定しているからこそ「だいじょうぶ」と負傷しないことを信じるのである。このようににぎわいのある村や町にも戦争が近づき、現時点では平和に暮らせているものの、村や町が戦場になるかもしれない可能性が示唆される。また、パグマンの近くで果物を作っていた「足のない人」は「あまくて、ちょっとすっぱくって、やっぱりおいしいなあ！パグマンのさくらんぼは世界一だ」と宣伝し、（こんな所で売れるかな？）とさくらんぼが売れないという当初のヤモのイメージに対し、実際には「飛ぶように売れ」る。

そして、父は一見不安を口にすることのない頼りがいのある大人として描かれているが、「道ばた」とは違い「人の行きかう大きな広場」で出店したにもかかわらず、すももが「半分以上も売れ残っ」ているように、ヤモが戻るまでは父が商売に集中できていなかったことが想定できる。とすれば、父の心に影響を与えていたと想定されるのは、ヤモが始めて商売することへの不安やハルーンの安否、戦争と今後の生活への心配などである。事実、ヤモが戻ってからは父はすももを売り切っている。

その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。

そもそも、中地・堀之内両氏でも指摘があったように、[12] 積み上げられてきたヤモたちの村での幸せな暮らしは結末で村の破壊というかたちで暗転するように、プロットレベルにおいても逆接・反転のパターンが見いだされる。

このように、逆接・反転のパターンは、「世界一美しいぼくの村」では、接続詞レベルでイメージと異なる事実の提示や期待に対する不安・不穏として現象し、ストーリー・人物レベルでもイメージと異なる実態の開示・示唆として現れ、プロットレベルにおいても戦争という災厄によって喪失される平和・人々の暮らし・村の美しさというかたちで展開する。このように逆接・反転によって読者に衝撃を与える方略が採用されている。

三　「世界一美しいぼくの村へ帰る」における順接

パグマンの村から笛吹きとしてサーカスに加わり世界中を巡業で転々としていたミラドーは、「ヤモ、どうしているかな」とヤモのことを「毎日思い出」していた。さらに、帰るときには「ヤモに会うときのことを思うと、心がうきうき」し、「ヤモのことを思うと、自然に足が前に出」ていき、破壊された村跡では「ヤモはどうしたろう」とつぶやき、「町へ行けば、きっとヤモに会える」と思うように、ミラドーは常にヤモを気に掛けている。二〇一五年度版指導書では、「知らない土地を旅して回るミラドーにとって、仲良しのヤモを思うことは、故郷とのつながりを保ち続けることであり、自分自身の原点を確認するものでもあったのかもしれない」とある。

戦争が終わり故郷に帰るミラドーが旅先で出会う人たちは思いやりのある人々ばかりであった。途中で別れた少年からは杖をもらい、ある夜であった「戦争で、何もかもなくしてしまった」が戦争終結を機に「やり直」すために「自分の村へ帰る」集団の中にいた優しい男性からは笛をもらう。サーカスで吹いていた笛は、戦争で行方不明になった父から最後もらったもので、びびが入り、ミラドーがサーカス団を離れて帰るときにとうとう音が出なくなる。しかし、男性からもらった笛は「お父さんの笛と同じにおいが」するように、ミラドーは男性になにがしかの父の面影を見ている。

ミラドーが何度か演奏する「グラ　バ　グラ　谷から谷へ　パグマンの風を君に送るよ。世界一美しいぼくの村の風を」という曲は、父や故郷を思い出し演奏している。歌・音楽は空気の流れすなわち風なのであり、村近くの峠にたどりついたとき「谷をわたる風が、ミラドーのほおをなでてて」くように、その歌は故郷の空気と結びついている。

ミラドーとヤモは、ミラドーが町の通りで吹く「笛の音に引きつけられて人々が集ま」り、それに呼応するように歌われた歌声の「なつかし」さにミラドーが声のした方を見たことによって再会する。笛の音と歌声というリズムによって二人の紐帯が強められている。

ところで、ミラドーの黒い肩掛けかばんには「ヤモへのおみやげがつまって」おり、帰る前にはミラドーは「自分の荷物の中に、町で買ってきた作物の種をいっぱいつめ」ていた。しかし、教科書版六枚目の挿絵で再会して抱き合っている二人のそばで地面に落ちて開いたミラドーの鞄には種と靴が入っている。もちろん長い道のりを旅する自分の予備の靴という可能性もないわけではないが、ヤモへの土産がいっぱい詰められたのが鞄であるとすれば、靴はヤモへのお土産の一つと考えられる。絵本は文字と絵の総合芸術であり、画家と作家が同一の場合には文字と絵は情報提供の信頼度としては同等である。

再会の抱擁には過去と現在が同じであることが示される。

二人は、別れた日と同じように、ほっぺたとほっぺつたをくつ付けて、しっかりとだき合いました

村に残っていた二人の思い出のすももの木は「焼けこげ」ているが、ミラドーが「よく見ると、えだ先に、小さなっぽみが

ついてい」た。それを語り手は「長い冬が終わって、村に春がやってきていた」と評するように、破壊の後の自然の再生が示されている。また、再会した「二人は、作物の種の入った荷物をかついで、村へ帰ります。春、村は緑でいっぱいになるでしょう」という表現は、現時点ではなくこれから二人が帰村することで種をまくことで生活再建の足がかりができ、村が再生する未来を示唆する。

最後に表現構造とからめて整理する。「世界一美しいぼくの村」では逆接・反転のパターンの標識として接続詞「でも」が使われていたが、「世界一美しい村へ帰る」では「でも」は二回しか使われない。

でも、毎日思い出すのは、なつかしいパグマンの村と、仲良しの友達、ヤモのことです。

なつかしいにおいがあちこちからします。でも、知っている人はだれもいません。

ここでの「でも」は、ヤモや知り合いを求める表現である。むしろ、「世界一美しい村へ帰る」で基調となるのは「また」「次の」「そして」「すると」「やがて」等の順接の表現である。

また、次の冬がめぐってきました。

すると、とうげの向こうに、見覚えのある山々が見えてきました。

そして、村の外れに、焼けこげたすももの木が立っているのを見つけました。

やがて、山あいの雲海の中から町がうかび上がりましあた。

ここでは順接表現の一部を抜粋しているが、レトリックレベルでの順接関係は、出会う人々がミラドーの帰村を支えるストーリー展開とも対応し、ミラドーがヤモと再会し村の再生・復興に至るプロット構造でも反復される。

結末の「世界一美しい村は、今も、みんなの帰りを待っています」という一文は、端的には比喩である。土地や自然は何も待たない。待つのは人なのであり、世界一美しい判断は個人差があり、自分に関わる場所以外にも美しい場所はある。すなわち、ここではミラドーとヤモ、そして語り手が村と一体化し、郷土の小さな共同体の再生・復興を願っているのである。

反戦・平和教材において短命であったあまんきみこ「雲」が日本軍の虐殺を扱っていたのに対し、本作は反戦・平和教材でありながら小さな共同体の維持・発展を願う限りで日本の教育政策の伝統・愛国志向とも乖離せずに扱うことができる。定番教材たりえているのはそのあたりに理由がないだろうか。

（1）「絵本を出典とした教材の一考察」（『解釈』二〇一四・六）四九頁。

（2）「比較研究授業を通して分かった文学的文章の読みを規定する諸条件」『日本教科教育学会誌』二〇〇三・九）七頁。

（3）前掲佐藤論文三頁。

（4）　勝倉壽一「「世界一美しいぼくの村」（東京書籍・小学四年）の読み」（『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』二〇一一・三）七頁。

（5）　前掲勝倉論文三頁。また、花坂歩・柳谷直明・河野晋也各氏は、主題を「世界一美しい村、パグマンを破壊した戦争の残虐さに対して，為す術がなかったヤモの悲劇」（「国語科教材研究における越境の試み――「世界一美しいぼくの村」を題材に」（『大分大学教育学部研究紀要』二〇二一・三）一六六頁）とするが、これも反戦・平和の主題系に位置する。

（6）　「読む力を育てる国語科の単元構想　「世界一美しいぼくの村」（小学校４年）を中核教材として」（『宮城教育大学紀要』二〇一三）一七頁。

（7）　前掲中地堀之内論文二一頁。

（8）　前掲勝倉論文五頁。

（9）　松本修・上越教育大学教職大学院「「世界一美しいぼくの村」を教材とした読みの交流の学習デザイン」（『全国大学国語教育学会国語科教育研究』二〇一二）六六～六七頁参照。

（10）　前掲松本・上越教育大学教職大学院論文六八頁。

（11）　虎谷優希「小林豊『せかいいちうつくしいぼくの村』」国語Ｂレジュメ（二〇一八・一二・七）六ページ。

（12）　前掲中地堀之内論文二一頁参照。

（本学人間発達科学部　教授）